

この人の仕事の流儀 vol.18

くり返す「Why not?」 自分との真剣勝負

分野横断的・実践的研究スタイルは、
まっすぐな生き方の産物

土木工学の専門家でありながら、心理学、教育学、哲学等の各分野の諸学会にも所属し、横断的な研究活動続ける藤井教授。研究活動を実践活動の一環として推進し、交通計画やモビリティ・マネジメントについての活動を進める一方で、言論人としても精力的なご活躍です。いったいその原動力は、どこからくるのでしょうか。



■藤井 聡(ふじい・さとし)

京都大学大学院 工学研究科 都市社会工学専攻 教授

1. 仕事の内容

- 1) 総合的社会科学に基づく「国家政策論」
- 2) 公共政策に資する「実践的な人文社会科学的研究」
- 3) 社会心理学・計量経済学を活用した土木・交通政策に資する「技術開発」

2. 主な職歴

- 1993年 京都大学大学院修士課程修了
- 1998年 スウェーデン・イエテボリ大学心理学科
認知・動機・社会心理学研究室 客員研究員
- 2006年 東京工業大学大学院理工学研究科(土木工学専攻)教授
- 2009年 京都大学大学院工学研究科(都市社会工学専攻)教授
- 2011年 京都大学レジリエンス研究ユニット長

3. その他、活動

- ・主な著書「列島強靱化論」(文芸春秋)、『公共事業が日本を救う』(文芸春秋)、『土木計画学』(学芸出版)、『社会的ジレンマの処方箋』(ナカニシヤマ出版)、『なぜ正直者は得をするのか』(幻冬社)等

「良い」と思ったことは 実行せずにはいられない

ある分野の専門家が他学会にも所属するのはよくあるものの、藤井先生の場合は土木学会の他、日本心理学会、応用哲学会、日本社会科教育学会など、国内外を合わせるとなんと10以上というから驚きです。幅広い活躍の原動力を探る意味でも、最初に専門の土木工学から心理学に目を向けたきっかけを伺いました。

その当時、交通の需要予測が専門テーマだった藤井先生は、より精緻化を図るための研究をされていました。予測といえば統計・経済学の手法が一般的な中で、先生がいち早く注目したのが、心理学でした。

「予測の精度を高める目的で心理学を利用する学者はいなかったのですが、ちょうど私の考えにぴったりあった研究をされている方がスウェーデンにいました。論文を読んで、これは行くしかないと思ったのです。土木の分野でそんな前例はなかったし、わざわざスウェーデン、しかも完全な異分野の心理学科にまで留学を? と思われた方も多かったかもしれません。しかし私にしてみれば、自分が良いと思ったことをしないという選択はないわけで、必然でしかない。まさに Why not? (なぜやらない?) です」とこともなげにおっしゃいます。その思考の原点をこのようにご説明されます。

「例えば私は、電車でケンカをしている人を見て見ぬふりができない。ケンカは止めた方が良いに決まっているのだから、止めない方が気持ち悪いし、仲裁をしない自分自身が許せない。そんな精神的潔癖性が、私にはあるのです。その原点は10代の思春期にさかのぼります。自分がなぜ死を選ぶことなく生きているのか、生きていく意味はあるか、と悩んだ中で出した一つの解答が、生きていく自分を正当化するためには『正しく生きる』しかない、ということ。もし正しく生かないなら死んだ方がまし、とまで思いつめた10代の自分に背かないためにも、正しい、良いと思ったことは何でも実行しないと気がすまないのです」。

何事も正面から向かい合ううちに 生まれた横断的・実践的スタイル

まあなあでやり過ごすのは大嫌いと言われる藤井先生のストイックな姿勢は、留学先でも大いに発揮されました。



研究室にて。背後の書棚には、先生の活動を裏付けるように、様々な分野の書籍が並び



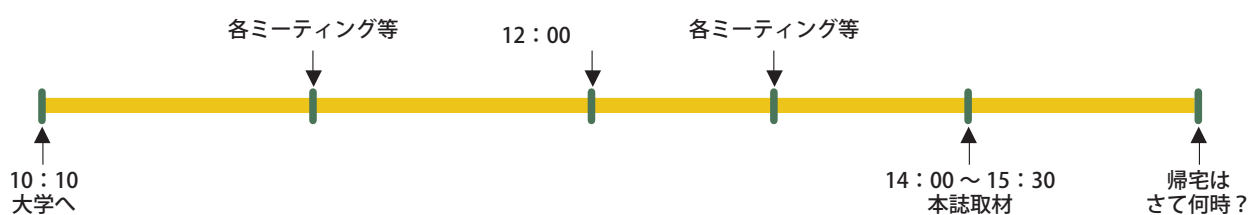
▼研究室には、これまでに受賞された様々な賞の表彰状が並び



▶『「文明」の宿命』(NTT出版)。最近の藤井先生の論文が掲載された一冊。この中で先生は議論の前にやるべきことがあるという論文を発表している



藤井先生のタイムスケジュール



取材当日の先生のスケジュール。普段は学外を飛び回ることが多く、1日の行動に定型パターンはない。取材当日は学内での打合せ等がメインで「牧歌的な1日」であったとのこと

「せっかく心理学者として仲間に入れてもらい、勉強するわけですから、スウェーデンに滞在しているときは、ただただ心理学に貢献することだけを考え、心理学者としての目的を達成すべく、キャリアを積みました。とはいえ藤井聡は2人いるわけではないので、心理学者としての研究には自ずと土木工学の考え方が入ってくるし、一方で土木工学の研究者として行動する中で、心理学の考えが混入する。心理学も土木工学も全く別で、自分では一緒にするつもりはないのですが、いつのまにか分野横断的・実践的科学研究となった。私の精神的潔癖性で、どの分野も一途に追究するうちに、自然とそうなったのです」。

その結果として、心理学のみならず、政治、哲学、法律、社会学、経済学などを総合的に援用しつつ、実際問題を考えるという、現在の研究スタイルが確立されたわけです。

とことん真面目に真剣にやれば、必ず成功に導かれる

それだけでなく、藤井先生には言論人としての顔も併せ持っています。マスメディアや様々な公の場での発言や、本を出されているのは周知の通り。

社会に提言できる土木工学の第一人者として、参議

院の東日本大震災復興特別委員会でも参考公述人として呼ばれ、その公述記録は出版物にもなって注目を集めました。

言論人としての出発は、西部邁氏の私塾に参加し、言論人、思想家としての思考・技術を学ばれたことからです。次々と活動の場を広げながら、それぞれを極める秘訣は何なのでしょう？

「もともと好きだった西部邁先生の元で学ぼうと思ったのも、塾生募集をしていることを知ってしまったから。知っているのに行かないのは、私の精神性に反するのです。もし私が他人と違うとしたら、何でも真面目にやるという一点につきます。成功しない、上手くないかと悩む人は、どこかでまあいいか、と妥協していると思うのです。『Why not? - なぜやらないのか?』の精神で、良いと思ったのならやらない理由はありません。もちろん大変だし、面倒くさいですよ。本当は家で子どもとゴロゴロしている方が好きなんですけれど(笑)。でも、思いついてしまった良いことをしなければ、生きることに思い悩んだ10代の自分に申し訳ないという気持ちがある。だから、常に背水の陣でやる。そうすると、仕事もうまく回って広がりも出るし、協力者や友人もたくさんできて、どんどん面白くなる。その繰り返しです」。



▲藤井先生の研究室がある京都大学桂キャンパス。広大な敷地に瀟洒な校舎が整然と並んでいる。広々としているため校舎内は迷路のよう



自分で取捨選択せず、 「縁」にまかせる

藤井先生には、もう一つ重要な仕事のスタイル、ポイントがあるといいます。それは、「縁」を大切にすることです。

「意外かもしれませんが、私のキャリアは、自分で選んだ結果ではありません。スウェーデンに行ったのも、たまたまある論文を目にしたからだし、京都大学に職を得たのも呼んでくださった先生のご縁のおかげです。西部先生の私塾に通ったのも、その頃私が住んでいた場所の近くだったから。縁を大切にすることというのは、自分で取捨選択をしないということです。ご縁があれば、その範囲の中で懸命に努力する。自分で取捨選択してしまうと、どうしても甘えが入る余地が出てしまうのです」。

学生に伝えたいことは 「ただ生きるな、善く生きよ」

学生に対しても、真面目に真摯に生きてもらいたいと望む藤井先生。しかしそれは訓示をたれるだけでは伝わりません。ともに学び、研究に励む中で、各々が感じ取り考えていくしかないからです。



書棚に見える赤い背表紙の書籍は、先生が大好きという哲学者ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインの全集

「結局はソクラテスが言った『ただ生きるな、善く生きよ』ということ、あの手この手で教えるのが教育だと思います。それは自分の生き方の流儀としてもあてはまるものです。他の人がどうこうでなく、学生たちが自分の良心に基づいて何をすべきかを自分の魂で考え、それに見合った振るまいや努力をしていかななくてはならない。それを教えるのは難しいことですが、彼らには将来、国や企業で大きな活躍してもらわなくてはならない。私利私欲でなく倫理的な価値判断のできる人材を育成するという大学本来の建学精神に、私は忠実に従っているだけなんですよ」。



◀▲学生室の様子。本文にもあるように、日本や世界の未来を担うであろう若きエリートたちに、藤井先生は日々の活動の中で「人の上に立つ」ことの意味を説く